



海とアート&デザイン

Theme
[SEA and ART & DESIGN]

まちの記憶を紡ぎ、
人がつながり、夢を形にする。

12/19 の開催直前に発生した台風の影響で、セブ(フィリピン)チームは参加を見送らざるを得ない事態となりました。「ART&DESIGN」は、まちの「ハレとケ」両面の歴史を紡ぎ、人がつながり、夢を形にする役割を、スラウェシ(インドネシア)/馬祖(台湾)/気仙沼それぞれのまちで担っていました。このセブの災害を、UMITOMACHI ファミリーのつながりで、夢を形にする一歩に変えていく。そんな想いを抱く時間となりました。

ART&DESIGN が、歴史を伝承する。

スラウェシからはDahriさんをゲストに、マンダールの伝統的な工芸品である織物と、その文化を後世に伝えるためにつくった本のストーリーやそこに込めた想いを伺いました。マンダールは漁業が盛んで、漁師と公務員が暮らすまちです。まちは織物を織る文化があり、暮らしの中で別の用途で使われていたものを再利用して織物を織る道具としています。絵柄は今の時代を表現するそうで、例えば1980年代後半から1990年代にかけてはバラボランテナを、聞いたあれば対立そのものを表現する柄になります。ポジティブな侧面だけではなく、歴史的な事実をありのままに表現しているのがマンダールの織物です。このまちのヒーローである漁師と、まちの歴史を紡ぐ織物を、一つのストーリーとして本をつくり多くの子どもたちに伝え、夢を抱く勇気を与えています。馬祖からはビエンナーについて、プロジェクトプランナーのTammyさんをゲストにご紹介いただきました。



昆野 哲
Satoshi Konno



海と音楽

Theme
[SEA and MUSIC]

音楽がつなげる海とまち

第5回のUMITOMACHIのテーマである「音楽」。

音楽は言語を超えた表現方法の一つであり、表現者のバックグラウンドや、感情・想いなどにより様々な表情を見せてくれます。異なる言語をもつ4都市から、様々なジャンルのアーティストが集い、彼らの楽曲についての思いや制作秘話を紹介してもらいました。

アジア諸国の音楽たち

スラウェシ(インドネシア)からはTheory of Discoustic (to d)というバンドが登場しました。彼らは、1つの楽曲制作に約2年の月を費やします。曲のテーマに沿った歴史などを多方面からリサーチし熟考された音色や歌詞はとても神秘的で、まるで1本のショートムービーを見たようなそんな気分にさせられます。

セブ(フィリピン)からは、ミュージシャンのKarl LucenteとSepia Timesというバンドが参加してくれました。

カールは、セブでギターブレイヤー兼プロデューサーとして活躍しながら、中央フィリピン諸語、中部フィリピン諸語、南ビサヤ小語群に属する言語「BISAYA」での楽曲を手がけるなど、地域に寄り添った音楽活動も続けています。

そんな彼のお勧めのバンドであるSepia Times。彼らの音楽は、優しいボーカルとサウンドが心地よいポップ・ミュージックで、当日の会場となった「くるくる喫茶うつみ」のオーナーは、イベントを通してSepia Timesのファンになったと公言しておりました。

花蓮(台湾)からは、ミュージシャンであり、サーファーでもあるKJが登場しました。

昨年発表された彼の楽曲の「The Northeast Monsoon / 東北季風」では、ビ

クリーン活動で拾ったゴミをパーカッションとして利用しています。彼自身が続けているビーチクリーン活動を、単純な活動だけでなく、どうしたら面白く続けていいかを考えた時に浮かんだアイディアとのことでした。

気仙沼からは、特定非営利活動法人ピースジャムの理事長である、佐藤賢さんにご参加いただきました。

2011年まで気仙沼で、ブルースバーを経営されていた佐藤さん。震災後に地元に音楽を届けるためにスタートした「気仙沼ストリートライブフェスティバル」について、現在のNPOの活動も交えながら、ご紹介いただきました。

音楽のつながり

「仲間たちと一緒に歌を歌い、食卓を囲めば、楽しい場所は完成する」。海外メンバーの1人が話していた言葉の一つです。

今回のイベントの最後に、佐藤さんのギターに、KJが即興で歌を披露するという、オンラインスペシャルセッションが行われましたが、そのほんの数分間に、参加者の距離がグッと縮まった、そんな不思議な感触がありました。

今後、UMITOMACHIで出会った方々と肩を並べ合唱ができるその日を楽しみに、これからも関係性が続していくことを祈っています。



加藤 尚
Naoh Kato



言語を超えた五感で楽しむ
「海と食」

食で巡るアジアの旅

英語全くわからない、どうしよう。
そんな私の不安を見事にワクワクに変換してくれた記念すべき第一回UMITOMACHI「海と食」。

イベントでは花蓮(台湾)、スラウェシ(インドネシア)、セブ(フィリピン)と気仙沼を中継でつなぎ、お互いの国の「海と食」について各国の情報を共有し合い、共通点や新しい発見を見つけました。

トップバッターを飾ってくれたのは花蓮です。案内人であるjingさんの知り合いのシェフ、ハオさんをゲストにお招きました。市場から食料を調達する動画から始まり、まちの風景や雰囲気の違いを感じ取ることができました。

料理のシーンが映る度に調味料や味に興味津々で、想像以上の質問が飛び交いました。また、台湾では気仙沼同様にマンボウを食べる習慣があります。気仙沼で食べられてきたマンボウ料理とは違うビジュアルに釣付けでした。

気仙沼からは日門定地網生産組合の須賀良央さんから漁の話を中心に、資源保護や世界的な問題の海洋プラスチックのお話をいただきました。海と共に生きている気仙沼ですが、漁師の方々は魚を獲るだけでなく、海という資源を守るために様々な活動を行っています。各都市の漁師の方々の多様な工夫があるからこそ我々は世界中で美味しい魚をいただけるのだと改めて思いました。

続いてスラウェシでは、ジャカルタを拠点に活動するシェフ、アルヴィンさんと中継を繋ぎました。海の真横で開かれる魚市場



海と食

Theme
[SEA and FOOD]

の映像では、魚の見せ方や加工の仕方など現地独特の雰囲気があり、文化の違いを感じました。中でも「ダブダソース」というとても印象的な名前のソースがあり、ライムなど柑橘系の材料が多いため唾液が出てくるような感覚がありました。

発表の途中には技能実習生として気仙沼に住んでいるヌルさんの誕生日をサプライズでお祝いし、バースデーソングを歌いました。誕生日を祝うという共通項がみんなの距離を縮めてくれました。ヌルさんの友人であるユリアさんは日本の食材でインドネシアの手料理を作ってくれました。いい香りに会場が包まれました。トリを飾ってくれたのはセブです。

慈善活動も行っているママ・アベスさんからお手軽に作れるフィリピン料理をご紹介いただきました。食材は日本でも買える物が沢山ありましたが、バナナリーフを使うなどのワンポイントが海外の風味を出すのに欠かせないものだと思いました。参加者の新たな食のレパートリーの一つとしてインプットされたのではないでしょうか。

距離を感じない関係性

英語がわからないという理由で海外に壁を感じていた私ですが、「海と食」という共通項を元に距離が縮まった気がします。英語はできなくとも、五感や相手の表情から汲み取る事で疑似的な会話ができたと思います。また共通点を探し合うことでお互いが顔の見える関係性を作れるのではないかでしょうか。

UMITOMACHIの繋がりを深め続け、いつか行き来できる関係性を築きたいです。



皆川 太郎
Taro Minakawa

海とマリンスポーツ

Theme
[SEA and MARINE SPORTS]



各ローカル地域に思いを馳せ、
肌で空気を感じる時間。

このテーマになったとき、やはり真っ先に気仙沼側のゲストとして思い浮かんだのは「NPO法人浜わらす」(以下「はまわらす」)。

こどもが安心安全に楽しめる場づくりは徹底しても、子どもはもやんちゃ。そしてなんと言っても大人もすごくやんちゃ。

でもだからこそ、意見を言いやすいし、やりたいこともなんでも発散できる雰囲気がある。

今回は、気仙沼ではまわらすの運営隊長でもあり、私がプライベートでも仲良くさせてもらっているひっこさんに気仙沼マリンスポーツの案内人をお願いしました。

海というそれぞれの人生のスパイス

11月と言う気仙沼では寒い中マリンスポーツ感は少し薄まっていながら海をダイレクトに感じられるマリンスポーツの会は、その地域の空気感や、気候、そしてそこに生きる人々の雰囲気が肌で感じるほどに伝わってきた。ドキドキするほどに!早くそこに行って町を感じたいと心から思った。

セブ(フィリピン)ではスキムボードを紹介してくれた。実はこの時は知らなかったけど、気仙沼でもやっている人がいるそうだ。波打ち際でできるのでこれはぜひはまわらすでもやってほしい。

スラウェシ(インドネシア)には、マカッサルウォータースポーツコミュニティという遠泳団体があり、メンバーは週3日ほど、約5km離れた島まで泳ぐそうだ。到着後、



鈴木 歩
Ayumi Suzuki

